

りしんねんだいき

離神年代記

第六話

兆し



秋本カイ

画戸谷展洋

主要登場人物

白居伽耶子(33歳) 白居家、三姉弟の末娘。人の思考が読める。
 白居葉子(享年31歳) 長女。サクヤグループの長。自分の死を予知し、弟の子である太郎を産んで亡くなる。
 白居明彦(36歳) 長男。姉の葉子が、自分の子を産んで死んだことにより、心を閉ざして廃人同様となる。
 笹原由宜(53歳) 伽耶子と20歳違いの従兄。葉子亡き後、サクヤグループを治めている。
 樋山友康(51歳) 白居家の使用人。葉子から強い信頼を得ていた。廃人となった明彦の面倒をみている。
 海老沢悠一(53歳) 白居家に隣接する病院の院長。笹原の同級生。
 笹原弓子(60歳) 由宜の妻。
 休場朗(41歳) 「書く」ことを運命とされる。
 白居太郎(12歳) 死んだ葉子の私生児として育てられている。
 森亜子(13歳) 明彦の力により巨木と共に消滅させられた佐菜子の娘。笹原家に引き取られている。
 開眼大悟(39歳) 白居家に間借りする政治家。
 前川(41歳) 明彦の元上司。休場の同級生。
 雪那(42歳) 大悟の姉。神経線維腫症。
 ユージン・ムーア(69歳) 消失と戦うことを決意した男。
 内海たすく 警視庁の刑事。

秘書

亜子は、駅の改札を抜け出ると、立ち止まって周りを眺めた。弓子の姿を見つけて、ぱつと走り出す。人の流れを、全く歩調を緩めること無く、横切つて来る。

(こんな動作が、似ている) と、弓子は思う。

ショートヘア、紺のブレザー、真つ直ぐな足。夫、笹原が突然、白居明彦の娘、亜子を養女にする、と言ったのは五年前のことになる。

明彦のことは、たいして知らない。もちろん、何度か見かけてはいる。忘れようもない。印象的な人物だ。特に茫洋としながら、ふとした折の身のこなしの軽さをよく覚えている。初めて彼を見かけたのが、今の亜子と同じ小学六年、あるいは中一だったか？ 四肢が長く、背の高いところも似ている。

「おかあさん」

「おかえりなさい」

駆け寄る亜子に声をかけてから、弓子はすぐ後ろに追いついて来た石渡多枝に、頭を下げた。

「いつもお手数をかけてすみません」

クリーム色のスーツに身を包み、一本の後れ毛もなく、髪をアップにした多枝は、そつのないにこやかな笑顔をみせる。

「いえ、亜子ちゃんのお世話は、楽しい仕事だと思っております」

完璧な返事を返す。弓子は、多枝のこういうところが、苦手だった。仕事用の顔というものに慣れていない。おそらく、弓子の夫、笹原も外では、快活でそつのない人づきあいをしているのだろうが。

今日は、亜子が入学する中学校の説明会だった。プライベートなことに笹原の秘書を使うのは気が引けるのだが、亜子を引き取った初めから学校関係などは、秘書の石渡多枝が保護者代わりで関わってきた。いや、亜子のこと以外でも、昔から対外的なことは、すべて彼女が対処している。笹原の妻を知るものはほとんどおらず、多枝をそう勘違いしている人間は多いに違いない。

逆に、弓子の日常生活の中で、彼女がサクヤグループのトップ、笹原由宜の妻であることを知っている者もいないであろう。お相子かもしれない。

多枝は、書類の入った封筒を弓子に渡しながら、

「中学校からいろいろ注意事項の説明があつたのですが、少々お時間よろしいですか？」

と言った。

「もちろんです」

弓子は、恐縮して、

「その喫茶店ででも」

と指差した。

「あつ、おじさん」

突然、亜子が声をあげた。駅の人ごみの中に休場の姿を見つけたのだ。休場は振り返って、三人に気付くと、いつもの快活な笑顔を向けた。

「あれ、休場君、車じゃないなんて、珍しい」

多枝が、すつと声をかけ、しまったという表情で、弓子を窺った。普段、そんなフランクにしやべることのない多枝である。秘書という仮面を取り落とした感じだった。

「同級生なんですよ」

それを察して、休場が口を挟んだ。

「そうなんですか？」

と、弓子。

「それからさ、俺はいつものように車だよ。駅前の駐車場に止めてある。ここまで、人を乗せて来て、見送ったところ」

「ふううん」

亜子が変な相槌を打つ。

「なんだよ？」

休場が問うと、

「女性？」

と、ませた口を利いた。

「休場さん、もし、お時間がありましたら、亜子ちゃんをご自宅まで送って頂けますか？」

多枝が、今度はあらたまった秘書口調で話しかけた。そのあまりのギャップに、休場と亜子が同時に吹き出した。

「はっ、お嬢様は、確かにお預かり致します」

休場が、笑いながら大仰な返事をする。多枝は、ばつの悪い顔をした。

「でも、もし何かお急ぎの用がおありでしたら」

弓子の心配に、

「いえ、これから、海老沢先生の所へ行こうとだけなんです、大丈夫ですよ。あの先生、引退してからは時間に縛られずに生きてますからね、何時に行こうが、それこそ行こうが行くまいが、ノープロブレムですよ」

休場が亜子を連れて去り、弓子と石渡多枝は喫茶店に入った。

ひと通り学校からの諸注意、書類の記入の仕方等の話が終わっても、多枝は席を立とうとしなかった。何か話があるのだと、弓子もわかっていた。亜子を先に帰したのはそのせいであろう。

「会社の方、どうなんでしょ？」

弓子の方から、切り出してみた。

「はい、いろいろ……」

今まで、弓子は、笹原の仕事のことを気にかけてきたことがない。

今更、そんな人間に会社の内情を聞かれても、説明するのはむずかしいだろう。多枝の言葉が曖昧に途切れたのも当然だと思

う。

「おうちで、社長の様子はいかがでしょう？」

今度は、多枝が尋ねた。

弓子にも、不安はあった。

透子の死んだ時、葉子の死んだ時、笹原はいつも奈落に引き込まれようとする自分のバランスを、息を殺して保ってきた。サーカスの綱渡りのように。断崖を登る登山家のように。心がどんなに傾いても、体そのものにエネルギーがあつたから、平衡を保てた、生きてこられたと思う。

それが……。もしかしたら、あの時からかもしれない。五年前のあの時から、風船の空気が抜けるように、少しずつ少ずつ、笹原の踏ん張り続けた足から力が失われている。

笹原が、休場と出かけたあの日、何があつたのかは知らない。人違いだったと休場は言つた。でも、その後、笹原は弓子に命じて、病院に多額の寄付を送り、一ヶ月後、無縁仏となつたその女性の遺骨を、病院近辺の海の見える高台の墓地に納めた。名前のない墓である。

後日その事実を知つた休場に、問い質された。

「一体、笹原さんはどういうつもりなんだ！」と。

「人違いでも、一度はお母さんではないかと思つた方なので、行方不明のお母さんの代わりに、親孝行がしたいと申して……」

病院に取り繕つたのと同じ訳をした。

弓子もまた、笹原が、実の母に会つたのだとわかつていた。そして、この返事を聞いた休場の顔に浮かんだ痛ましげな表情から、その再会が非常に不幸なものであつたことは想像がついた。

「ニュースなどでも、おわかりのように、今、社長のまわりのことは悪い方へ悪い方へと流れています」

多枝が話し始めた。

「はい」

「出来る限りの手は打っているのですが」

「……」

多枝は、何を話したいのか自分でもよくわからなくなっていた。

「社長の力になってあげて下さい」

「はい、いえ、こちらこそ、よろしくお願い致します」

弓子は、ただ恐縮して頭を下げるだけだ。会話は上手く噛み合わない。あきらめて席を立った。

「変なことを申し上げてすみません」

確かに、秘書が社長の妻に（力になってあげて下さい）などと言うのは、馬鹿げている。

弓子は、首を振る。（そんなことはありませんよ）というジェスチャーであるが、別れ際、

「笹原も私も、本当は何もいららないんです」

弓子がほとんど独り言のように言うのを、多枝は聞き逃さなかった。

改札を通って、駅の階段を降りながら、ため息が出た。弓子が妻であることは、笹原社長にとって、不幸なことなのか幸い

なことなのか。

石渡多枝は、学生の頃、人が馬鹿に見えて仕方なかった。実際に彼女の知能指数は、群を抜いていた。父親は政界の巨物で、毛並みもいい。兄や叔父たちは各界で活躍している。だが、多枝にとっては、そうした兄や叔父たちさえ、くだらなかつた。志がくだらない。価値観がくだらない。心がくだらない。そう思えてしまう。

小説は必要最低限しか読んだ事がない。ストイックに体を鍛えたり、数式を解いたり、絵を描くことが好きだった。人につきあつておもしろいと思つたこともなかつた。何人かリスペクトできる教授もいたが、その研究分野以外でつきあつて失望するのはいやだった。

初めて人に魅かれたのは、白居葉子である。大学在学时、就職説明会のような学校行事があつた。たいしたものとも思えなかつたが、父親の用意した道に進むのは、もつとくだらなく思えた。

葉子が何を話したかは覚えていない。ただ、終了後、廊下ですれ違った時に声をかけられた。

「そんなにつまらない？　うちに入社してみたら。もう少し楽しい人生になるかもしれないわよ」

何をつまらないと見抜かれたのだろうか？　葉子は、その部分には触れず、屈託ない笑顔を向けた。自分よりわずか三歳年上

の女性が十以上、年の離れた兄や叔父たちより、ずっと圧倒的なオーラを放っていることが不思議だった。

石渡家の、親の思い通りにならない末娘は、結局親の用意した就職を蹴って、当時の白居株式会社に入社した。親戚中から呆れられた。親にも見捨てられ、もともと変わり者なのだからと、放っておかれた。

それから、葉子が亡くなるまでの五年間、白居株式会社はサクヤグループと改名して、発展を続けた。あれほど多枝の選択をなじった父が、(娘はサクヤグループの社長秘書をやっている)と自慢していた。そういうところがくだらないと思ってしまうのだが。

葉子が亡くなって、父親は山のような縁談を持ち込んできた。現職総理大臣の孫というものであった。

(なぜ、あの時、会社を辞めなかったのだろう)と思い返すことがある。子どもを生むというのは、魅力的なチョイスだ。自分の肉体を鍛えるより、数式を解くより美しい。どんな精緻なロボットより、どんなに魅惑的な人間より、自分の複製をなめるのは、ファンタスティックなことだろう。

笹原はいつも多枝になれなれしく話しかけてくる男だった。

葉子の愛人と陰口を叩かれながら、その立場に唯々諾々としていた。すべてを、葉子が決めているのに、サクヤグループの多くの権利が笹原の名義だった。対外的な顔として、にやけた笑顔で交渉の席に臨む。やっていることは、葉子の言うとおりに

しゃべるだけのこと。葉子の秘書である自分には、すべてわかっている。それなのに、気軽に近寄ってきては、平気な顔で軽くをたたいた。

葉子が死んだとき、すぐにも、会社を辞めるつもりだった。

その日の翌日、笹原はいつもと変わらなかった。葉子を亡くした衝撃やら、会社の行く末に対する不安やら。寄ると触るとさわさわと、声を落として話さずにはいられない社員たち。その中を、いつもと同じなれなれしきで話しかけてきた。

「多枝ちゃん、ねえ、葬儀のことなんだけど……」

(生まれてこの方、多枝ちゃんなどと呼ばれたことはありません)

毎回きつちりと訂正してきたその台詞を、その日は、使う気にもなれなかった。だのに、笹原は、葬儀の段取りから、すべての日常の業務まで、何事もなかったかのようにこなした。

そこで初めて気が付いた。笹原が本当はサクヤグループのすべてを把握していること。葉子の腰巾着のように振る舞いながら、一人でもすべてを仕切れる頭脳と決断力を持っていること。だとしたら、彼はなぜ仮面を被っていたのだろう。

その直後、多枝は、会社の存続をかけて、笹原と共に砂漠へ飛ぶはめとなる。それからもう、年中世界を駆け回っていた。

葉子亡き後、笹原の秘書になって十一年。多枝は、笹原と共に仕事をし、魅了され続けている。サクヤグループを、日本はおろか世界でも有数の企業に押し上げた。そんなことのできる

男と出会ったことが多枝の誇りだった。

だから、弓子にもう少し、妻として笹原の支えになつて欲しいのだ。

ここ数ヶ月、じりじりと追いつめられている。十年以上、石渡家の縁者、政界・財界、各界に散らばつた彼らと情報を共有してきた。もちろん、こちらからも援助してきたし、それなりの便宜も図つてもらつた。それが、潮の引くように離れていくところ、彼らにはサクヤグループから離れようとする何か共通の理解がある。今はまだ、表向きは事業合併の失敗だったり、訴訟問題での敗北だったり、リコール騒ぎですんでいるが、根はもつと深いところにある。

四十に手の届いた娘である、その結婚はあきらめたはずの父から、それでもどうしても会社を辞めて、家に戻れ、と言つてきた。差し迫つていふのだ。そう思うと、闇雲に不安にかられた。弓子は(何もいらない)と言つた。そんな個人的なことを話したいのではない。笹原は、世界のサクヤグループのトップなのである。いや、それだけではない。今の彼の支えているものの大きさを理解してあげて欲しかった。

プ
ロ
ポ
ー
ズ

亜子は、駅舎からロータリーに出た所で、もう一人知り合いを見つけた。

「大悟おじちゃんだ」

そのことを伝えようと振り返ると、休場は身を低く屈めて、客待ちで並んでいるタクシーの陰に隠れている。

亜子は、ケラケラ笑つた。意地悪く、

「大悟おじちゃん！」

と、大声をあげて、手を振つた。

「亜子ちゃん！ 可愛らしいご声援ありがとうございます！」

いつもの大悟らしい、元気溼刺の名調子で返事が返ってくる。それも、拡声器の大音量である。駅前ロータリー、時計下の高い植え込みに登っている。仁王立ちでただ一人、拡声器片手にしゃべりまくっている。五年前には、聞いている人間など、誰もいなかった。今は、十重二十重の人の輪が出来ている。

ブームというものが、政治家にまであると思うと、いかにも胡散臭い大悟にはお似合いである。馬鹿らしくも政局の風向きで、この五年に四回もの選挙があつた。大悟はお決まりの泡沫候補としていつものように立候補。なんの間違えか、参議院に当選した。次の選挙で、衆議院に鞍替え、一回ごとに得票数は増し、マスコミの取り上げ方は、ヒステリックに加熱。ついに、閣僚にまで出世した。

ブームの火付けは、何を気に入られたのか、女子高生のアイ

ドルになったことだろう。選挙権のない小娘どもの戯言と言われていたが、二年後には、彼女たちも選挙権を持ち始めた。一年ごとに、ファンは増えていく。近頃は孫の女子高生たちのラブコールが、爺婆にまで伝播したのか、地藏通りの取材でも一番人気となっていた。

そして、何よりの凄さは、それでも大悟は変わらないことである。

休場は、これ以上声をかけるな、とばかりに、亜子を引つ張つて、サツサと地下駐車場への階段を降りた。

「どうして、おじちゃんは、大悟おじちゃんが嫌いなのか？」

「訳なんかないよ、うまがあわないんだ」

「大悟おじちゃん、すつごくいい人なのに」

（だから、だめなんだ）

休場は、亜子にそう言いたかった。

（いい奴なのは、わかつてる）

亜子を送り届けてから、海老沢病院を訪ねた。引退後の海老沢とは、お互い独り者の身軽さで、よく飲み歩いている。こうして、自室で二人、朝まで飲むようなこともある。年は十歳以上も違うが、うまが合うのだ。

「今日は、徹底的に飲もう！ あんまり君は役に立つ奴ではないからな。こういう時に、役に立ってもらわないと困る」

海老沢は、顔を合やすなり、訳のわからない理屈をこねた。

休場が、どうしても口を割らない海老沢から、透子の死んだときの話を聞きだしたのも、酔わせたあげくのことだった。娘が病死して、それを嘆く父親が自殺を図った。不自然な気もするがそこまではよしとしよう。でも、なんでその自殺の仕方が、果物ナイフを自分の男根に突き立てるといふ馬鹿げたものなんだ。そんな話は聞いた事もない。ずっと、引つかかっていた。こんな納得のいかないことは、書けないと思った。三年前、ほとんど酔い潰れながら、ついに海老沢は、その話をした。

「妹をつくつて、いつしよに幸せに暮らして」

透子の残した、その言葉が、キイワードなのか？

「ボクの子は、と・お・こ・だけだ」

笹原が生死の淵で繰り返し続け、呪われたように海老沢の頭の中にインプリントされたフレーズ。

それが奇妙な自殺未遂の答えなのか？

ただ……

ひとつだけ、休場なりに答えの出たこともあった。

「ヨリは、俺を赦すのか？」

海老沢はそう言った。

笹原を力づけようと、透子の最期の言葉を伝えただけで、なぜそこまで、笹原に対して責任を感じるのか。海老沢の気持ちが変わらなかつた。思い込みすぎだと思つた。

でも、今、休場自身、同じ負い目を笹原に感じている。

（俺が追いつめた）

五年前のあの時、笹原は、訪ねて行った病院にいた老婆の態度から、何かを感じた。

「俺の父親は、白居嘉一郎なのか？」

と、休場に問うた。

なんと返答したのか？ 覚えてもいない。

斬り付けられた言葉の刃に平伏してしまった。返事を取り繕おうとした。その取り繕おうとしたことが、笹原への雄弁な答えとなった。笹原は確信した。自分が嘉一郎の子であることを。

（確信に変えてしまったのは俺なんだ）

と、休場にはわかっている。

透子が死んだ時、海老沢が透子の最期の言葉を伝えたことによつて、笹原は果物ナイフを自分自身に突き立てた。

「結局、笹原の手に果物ナイフを握らせてしまったのは俺なんだ」

と、海老沢は言った

（なら、笹原を車のヘッドライトに飛び込ませたのは、俺だということにならないか）

と、休場は思う。

「これ以上、奴を追いつめないでくれ」

海老沢はそう言った。

自分もいつか誰かに言うのだろうか。

「これ以上、奴を追いつめないでくれ」

その誰かが、笹原に手渡す凶器は、なんだろうか？ その予先

は、誰に向けられる!? 皆が笹原を追いつめていく。一体、彼に何を犯させようというのか？

馬鹿げた妄想……。

酔いの回ってきたせいだ。

「開眼大悟に会ったのか？」

「見かけただけですよ、とっさに車の陰に隠れましたからね。

向こうには気付かれていない」

海老沢は、笑い出した。酒を持つ手が揺れて零れた。

「次の総理候補も、ひどい言われようだなあ」

「総理候補？ ありえないでしょう」

「最新の下馬評だぞ。三十代で閣僚入りした異例尽くめの男がついにそこまで昇り切るかってな！」

「三十代って言ったって三十九歳ですけどね。でも、世の中どうかしてますよ。何歳だろうが、閣僚入りさせた時点で間違ってる。いくら人気があるうと、それらしく弁が立つても、所詮あいつは……。大体、開眼大悟なんて、名前からふざけてますよ」

「そう言えば、ヨリの奴、開眼大悟って呼ばないよな。何て呼んでたっけ？」

「大言壮語でしょ」

「そうだ、大言壮語！」

「ホントそっちの方がずっとピツタリですよ」

「この前も、ええと、どこだかの大使館に乗り込んだって話、聞いたか？」

「いえ」

「天皇陛下のお見舞いに送られた花を突っ返しに言ったらしい」

「どうやって」

「もちろん、送られた花そのものを手に入れられっこないから、自分で花屋で買ったんだろうけどな」

「そりゃそうですよね、でもどうして」

「直接本人に聞いたんだけどなあ、なんだったかなあ？ 忘れた。でも、まあ、言い分はあるんだよ。熱い義侠心でやつがね」

休場は、思いあつた。

「その話って、例の紛争国ですよ。文化交流で、昔まだ皇太子だった頃に寄贈したんだかを、故意に壊したとか何とか」

「そうそれだ！ この間の自衛隊派遣を恨みがましく物にあたっておいて、いまさらなんだ、って息巻いてた」

「相変わらず、細かい奴だなあ」

「そう言うなよ。その通りだけど。」

でも、大悟には、姉さん経由でもいろんな情報が入ってくるから、俺たちよりはずっとそこらへんの事情には詳しいよ」

そこで、不自然に、海老沢が酒を煽った。今日は、かなりピツチが早い。

「で、何ですか？」

「何？」

「さっき言った、あまり役に立たない僕が唯一役に立つ、飲むお相手に呼ばれた訳ですよ」

「……」

「また、学会でいじめられましたか？」

海老沢の愚痴の九割は、研究学会のことだった。医者を引退して、DNAの研究に戻ってから、相当あちこちでいじめられているらしい。海老沢の言によるなら、殺したいほど憎まれているというのである。

原因は笹原だ。二十年以上も前の学会の倫理観からすれば、恨まれる筋合いはないのかもしれない。しかし、日本のDNA研究のすべてを世界にさらけ出したのも事実だった。DNAの二重らせん、四種のヌクレオチド、コンピューターによるゲノム解析。すべてがこれからという時代だった。研究者の手には、それぞれパーツが握られていた。それを積み重ねて、到達するはずの高みだった。笹原という天才は、それを一望し、仮説を構築してばらまいてしまった。十年余の研究結果が何を示していたのか、アメリカの研究論文によって、初めて理解した日本の研究者もいたという。

（そこをね、繋いでしまったのが、笹原だとしたら、恨まれても仕方ない。研究というのは、理論と実証、上と下から進んで



いって、出会って成り立つ部分があるからね)

海老沢はそう考察する。

それにしても、それが日本で実を結び、後進のために道をつけたのなら許されるのかもしれない。が、笹原は、研究を止めた。蒔いた種の行く末も気にもかけず。

(別に、笹原由宜のお友だちって、名乗っているわけじゃないけど、古い教授の中には、そこそこわかってらっしゃる方もいるから)

海老沢は、榮譽を望んでいるわけではない。だから、そのことへの圧力はかまわない。しかし、研究において個人では困難な部分を補ってくれる協力者たちに、圧力をかけるのは止めて欲しかった。研究が進まない。

「ふう〜」

海老沢がまた酒を煽る。今日はそのことではないらしい。

「らしくないですよ。うじうじするのは」

「ふう〜」

返答なしである。

「君はどうして結婚しないんだ？」

「意味はありませんよ。結婚に向いてないのかなあ。風来坊ですからね」

「君はぶりたいタイプだな？」

「ぶりたい？ 鱈と鯛」

「なわけないだろう、古風に言うなら、露悪的って奴だ」

「はいはい、話を誤魔化さないで下さい。愚痴聞かないで帰っちゃいますよ〜」

海老沢は、もう一度酒を煽ると、ドンと音のするほどの勢いでコップを置いた。

「プロポーズした」

「誰にです？ 僕の知ってる人ですか？」

「知ってる」

「誰です？」

「雪那さんだ」

「えっ！」

やっぱり、俺は凡人だ。と、休場は思った。

「おめでとうございます。なんだ、いい話なんじゃありませんか！」

日本人らしからぬリアクションだが、海老沢の手を掴んで、激しく握手した。うれしかった。めっちゃくちゃ、うれしかった。

彼女が素晴らしい女性なのは、わかっている。でも、あの姿形を乗り越えることのできる人物がいるとは思えなかった。彼女からは、肉が崩れていくイメージを拭えない。結婚なんて思いつきもしない。

「あなたは、すごい人です」

「俺には、驕りがあったんだ」

休場の大喜びをまったく無視して、海老沢は、肩を落として

俯いた。

「結婚を申し込むことは、自分にとっての一大事で、自分の覚悟の決まることですがすべてだと思つてた」

「なんのことです？」

海老沢が何を言おうとしているのか思いつかない。

「断られた」

「えっ」

「雪那さんに断られたんだ」

「えっ」

「即答だった」

「えっ」

何度聞き直しても、意味がよく飲み込めない。

「なんで？」

「好みではないんだそうだ」

不謹慎なのはわかっていたが、思わず笑い出していた。

「好みじゃないって、言われたんですかあ？」

「失礼な男だなあ、なんでその台詞を聞き直すんだよ。それも大笑いしながら」

そう言いつつ、海老沢も吹き出していた。

「俺は、くだらない！ 俺は、浅はかだ！ 俺は結局、彼女を一人前の女性として見ていなかった」

「そうだそうだ！」

休場は手を打って、囃し立てた。

（それでも、プロポーズしたあなたは、世の中のどんな男より凄いいと思うけど）

「休ちゃん、君はいい奴だよ、今日はとことん付き合ってくれ」「はい、はい、付き合いますけどね、その休ちゃんは止めて下さい」

と釘を刺したにも関わらず、海老沢は、休ちゃんを連発し続け、とことんどころか、一時間もしないうちに酔い潰れた。

開眼大悟

休場は、海老沢を布団に入れて、きれた煙草を買いに出た。

そろそろ、十二時になる。三月とはいえ、まだまだ肌寒い。

日が長くなったぶん、気持ちのがんびりするの、多少の通りがある。二人の男が、急に目の前に現れた。暗闇から突然現れたような気がしたのは、服装が黒だったこともあるが、顔も黒い。日本人ではなかった。そう言えば、昼間駅を歩いたときも、外国人の増えたことを実感した。

コンビニで煙草を買って、出て来ると、人だかりがあった。

割ってはいるほどの人垣ではないが、数人、立ち止まって見ている。休場も加わった。揉め事を飲み込むには時間のかかるものだが、どうにか、理解できた。事の起りは一本の薔薇の花らしい。

あきらかに、浮浪者と思われる男が、実に鮮やかな一本の深紅の薔薇を持っている。それも、胸に掻き擁くように、大事そうに握り締めている。申し訳ないが、コンビニの灯りに群がるような暇なガキどもがこれを見逃すはずがない。からかいたくなる気も、まあわからないじゃない。それほど、汚い浮浪者と深紅の薔薇の組み合わせは、珍妙だ。

「だからさあ、おじさん、それなんなのよ？ って、聞いているだけだろう？」

初めはそんなだった。が、浮浪者は、両手で薔薇を握り締めている分、すべての荷物を体に括りつけたかんじになっている。若者たちは、こずいたり、引つ張ったりを始めた。男は、滑稽なほどによたよたし、それでも両手でしっかり薔薇を握り締める。行為はエスカレートする。足をかけられて、転んだ拍子に薔薇が手を離れた。それを拾ったリーダー格の男が薔薇を大きく振り回した。浮浪者が取り戻そうとすると、隣りの仲間に投げる。浮浪者は取り戻そうと、そいつに掴み掛かった。

（まずいことになるぞ）

と、思ったとき、一人の男が飛び込んで来た。

正義の味方登場かと思いきや、簡単に足払いを食わされ、すつ転んだ。

「イテッ、痛ええッ」

転んだだけなのに、大仰に痛がっている。

「なんだ、おまえ？」

「君たち、一人を抛つてたかつて、卑怯じゃないか。原因はなんなんだね」

開眼大悟だった。あきらかに、事の経緯は見えていない。いかにも大悟らしい登場の仕方である。

(騒ぎを大きくして、むしろ困るのはお前だろう！)

大悟と係って、面倒にならなかつたためしがない。

古典的ではあるが、

「あつ、おまわりさん、こつちです。すみません、こつちで、なんか喧嘩してまゝす！」

休場はとりあえず暗闇に向かって手を振りながら、大声で呼びかけた。

あつというまに、ガキどもはいなくなつた。

浮浪者も、おたおたと逃げ去ろうとしている。

「おじさん、大丈夫？」

ひっくり返つたままの大悟に声をかけられて、浮浪者はむしろ迷惑そうだった。

休場は、花弁の落ちた薔薇を拾うと、浮浪者の手に握らせた。

綺麗にトゲも抜いてある。どこぞの庭から採ってきたものではなく、花屋で買ったのかもしれない。

「えつ、えつ、何それ？ おじさんどうしたのそれ？」

(だから、それが事の発端なんだよ。おまえだつて、なんだか聞きたくなるだろう？ まつたく、馬鹿！)

と言う言葉を飲み込んで、休場は、浮浪者に(サツサと行け)

と、手を振つた。

よたよたの浮浪者に、野次馬の一人が声をかけた。ニュアンス的には(大丈夫か?)と聞いた様だったが、英語でも、ヨーロッパ圏内の言葉でもない。浮浪者は、同じ言語で返事をした。野次馬は納得してその場を去る。そして、浮浪者も去って行く。(なんなんだ?)

休場は、腑に落ちないものを感じた。

「おいおい、待てよ、一言礼ぐらい言つてもいいだろう」大悟も、立ち上がるうとしたが、

「いたつ、本当に痛！ 足折れた」

あれしきのこと、相変わらずの軟弱者である。

「わかつた。うちまで送つて行くから、騒ぐなよ」

その言葉に、大悟は初めて休場をまじまじと見た。

「あれつ、休場さん、朗さん、いやあ、こんばんは」

(何をいまさら。まつたく、こいつ、どこまで惚けた奴なんだ)休場は、頭が痛くなりそうだった。

「いつたい、なんだつたんですか、今の騒動は？」

足を挫いた大悟に肩を貸しながら、白居家までの夜道を歩く。

その間、大悟はずつとしゃべりっぱなしだった。

(だから、なんだかわからない騒動に、ああいう風に堂々と登場するなよ)

と言いたところだが、休場に口を挟む隙を与えるような奴

じゃない。

「近頃は、親父狩りだとか、ホームレス襲撃だとか、わけのわからない事件だらけですよ」

自分で投げかけた質問にも、自分で答える。

開眼大悟は、もちろん本名ではない。雪那さんの弟であるから、苗字は同じ、納矢である。名前は、毅。開眼大悟は、彼が勝手に自ら名乗っただけのこと。休場から見たら、開眼も、大悟も、本人からあまりにかけ離れた単語だ。そういう名前を、選挙で使おうという神経が知れない。

呆れ果てた奴なのである。

三十九歳が、十も若くみえる。明彦の浮世離れた年齢のわからなさとは違って、大悟の場合は、性格も俗っぽいし、顔の作りも濃い。ただし、顔立ちは整っている。なにしろ、白系ロシアの血が入っているのだ。背が高く、ハンサムで、ロシア貴族の末裔となれば、確かに女子高生のアイドル向きだ。それに、政治家としては若手だが、高校時代から政治活動に興味を持ち、二十年間まっしぐらなのだから、論戦では決して引けをとらない。ずっと、街頭で自分の政治信念を語り続けている。

そこまでは、ご立派なのだが、どうも休場が大悟を苦手とするのは、キャラが恥ずかしいことだ。さっきの騒動がいい例である。

ただ、考えてみれば、風のように姿を消したガキどもより、

ミミズのようにのたのたした浮浪者より、警察が現れて一番まずいのは、大悟であろう。仮にも、先日閣僚入りした男である。

「そうだよ、おまえ、内閣入りした奴が、こんなところで油売ってる場合じゃないだろう？ 昼間も、駅前でしゃべってたし」

「いやいや、今日は仕事お休みだし」

「そういう問題かよ。相変わらず、ありえないやつだなあ」

「別に、ずっとこうやってきて、政治家になったし、ずっとこうやって、続けてくさ」

(さすが、口八丁、こういうところは妙に説得力がある)

「俺の落選回数知ってるか？ 区議・都議・国政。選挙に立候補し続けて、ご先祖様の財産食い潰してきたんだ」

「威張るようなことにも思えないけどな」

「俺のご先祖様の財産は、革命のときロシアから持ち出したもんだ。だから、俺は、この金を世界平和のために使うんだ」

「立候補が世界平和か？」

「そうだよ！ そうだろう？ まずは、人の意識を変えなくちゃだめなんだ。みんなに、自分の信念を語らなくちゃだめなんだよ」

「なるほど、そこにきたか」

(こうやって、煙にまかれるのは、休場だけではないだろう。やっかいなのは、本人もまったく、そう思っていることだ)

白居家の門の前に着いた。海老沢先生のことがある。雪那さ



んに会いたいのはやまやまだが、時間が時間だけに、遠慮することにした。明日あらためて、訪問しよう。

「あとは、一人で歩け！」

と、大悟を門の中に放り込み、ふと足元を見ると、門柱に何かあった。

一輪の薔薇の花である。もちろん、さつきの浮浪者のものではなからう。あきらかに、花の品種が違う。だが、やはり赤い。

遠くから、かすかに、人の声がする。門の中ではない。この夜道の向こうの方。二、三人の声。歌を歌っている。辺りを憚るような小さな声。くぐもつていて……、男なのか、女なのか？

それは、休場も知っている歌だった。昔聞いたことがある。流行り歌だ。

森 に 住 む

早朝、散歩する雪那を待って、白居家の森を訪ねる、という思惑は、全く無理だった。すでに、日は高く上がっている。海老沢も、珍しく用事があると言ってでかけてしまった。

休場は、いつもの裏口からではなく、白居家の表門に回った。昨夜の薔薇の花が気になったのだが、もちろんもうそれはどこかに片付けられてしまったようだ。二段の石段を登って、門に入ろうとするとき、老紳士といっしょになった。足腰はしっか

りしているが、八十を過ぎていたのではないか。何気なく見た横顔に覚えがあった。

「稲垣教授ではありませんか？」

休場の問いに、老紳士はゆっくり振り向いた。休場に目を留め、誰であるかを考えている風だった。

「休場朗と申します。何度か植樹祭や講演会で先生のお話を伺ったことのあるものです」

「それはそれは」

柔和な笑顔を見せる。

「お一人ですか？」

休場は、思わず周りを見回した。

稲垣恒夫は、植物生態学の第一人者である。学問の分野としての有様も関係するのだろうが、各企業との繋がりが強い。サクヤグループでも、植樹事業への貢献には力を入れている。

「君はこの森の人間なのかな？」

「この森の人間？」

（それは、何か不思議な言い回しだった）

休場は、稲垣教授のお供をするような形で、白居家の森を歩かはめになった。稲垣教授はタズさんに、訪問を告げ、勝手に森を歩かせてもらうよ、と声をかけた。タズさんは馴れた様子で、どうぞどうぞと愛想笑いで、二人を送り出した。

「もう齢九十じゃ。そうそう世界中、いや日本国内だってあち

こち歩き回れるもんじゃない。東京にこんな森が残っているなんていうのは、奇跡だねえ」

「そうなんですか」

「ここは、人の影響を受けていない。まあ、排気ガスや騒音、夜の灯りなんて問題はあっても、人の作った森じゃないんだ。前に、一人男性がいたね、この森には」

「樋山友康さんのことですか」

「そうそう、今でも、あちこちの森をまわっているかねえ」

「だと思えます」

「彼は、人間らしからぬ人物だね」

教授の話は中途半端に終わり、森の奥のあちこちの木々、草本、土壌を丹念に調べ始めた。調べ始めるともう、休場のことなど眼中になかった。

好奇心の強い休場は、稲垣教授の様々な採取、測定の道具に興味をもったが、やがてそれにも飽きてきた頃、木の間から人の声が聞こえてきた。建物の近くまで戻っていたのだ。

声は、本多病院分室のものであった。休場の友人、前川の一人娘春菜が預けられている。この本多病院の病院長夫人、頼子と明彦の経緯についても、話としては耳にしている。白居家に関わる他の多くの話のように、現実離れしていることは否めないが。

何度か頼子と会ったこともある。前川が信頼するだけあって、確かに誠意のある人物に見えた。

「あの子たちは？」

稲垣教授の問いに、休場は白居家の離れを本多病院が、子どもの心療内科として使っていることを話した。自閉症以外にも、PTSD（心的外傷後ストレス障害）や深刻な抑鬱症の子どもたちが通院する。虐待の為、ここで生活している子たちもいた。

森を背景とした、池の前の静かな空間。彫像のように立っている、座っている子どもたち。話し声は、ほとんど彼らを世話するおとなたちのものだ。

「こんにちは」

休場はだれにもなく挨拶をした。

「こんにちは」

看護師やボランティアの女性らしき人々が返事を返す。が、

子どもたちは、声の方を振り返ることもない。

教授と休場は、母屋の方へ向かった。

「伽耶子さんに挨拶して行きますか？」

休場が訊ねると、教授は首を振った。

「今日は遠慮しておきましょう。次のときにでも」

その答えに、休場は頷いた。伽耶子は、あまり人と会うことを好まない。この二、三年とみにそんな風だった。

母屋の近くでは、畑を耕作する男たちをみかけた。が、それ以外は、やはりあの池の淵で見かけた子どもたちのように、立ったり、座ったり、ぼんやりと過ごすおとなたちがいた。その中には、高野美津子の兄、洋一の姿もあった。明彦の力によつ

て、殺された看護師の兄だ。まるで、森の木々の一本でもあるかのように、空を眺めて立っていた。

そして、ここにもそれを世話する女性たちの姿がある。

「弓子さん」

休場は、知った顔を見つけて声をかけた。

「休場さん、昨日は亜子ちゃんを家までありがとうございました」

弓子は、そう言って休場に頭を下げ、続いて、いっしょにいた教授にも会釈した。

そこを離れてから、教授は、休場に耳打ちした。

「感じのいい女性ですね」

「はあ」

確かに弓子に対して一番適切な表現かもしれない。

「天国というのは、どんな所でしょう、お釈迦様が蓮の花の上に座っているのですかねえ」

教授が歩きながら、話し始めた。

「私は、この年になってもこうして歩き回りたい人間ですから、じつとしているなんて無理でしょうね。大体、座禅を組んで手足のなくなってしまう人がいませんでしたか？」

「達磨大師のことですか？」

「そうそう、じつとしているなんて体に悪いんですよ」

「そういうことではないと思います」

「ところがこの人々は、まあ、なんとも天国に住むに相応し

い人たちじゃありませんか。人と争うなんてこともない。世話をする人もされる人も、ただそうしているだけで、自分のためでも他人のためでさえないように見える。静かで、まるで蓮の花の上に座っているようだ」

「心に病を持っている人たちです」

「そうですね……」

昔ここで、友康君と話したことがあるんですよ。森の話です。

私が、一生をかけて学んだのは、時間をかけてゆっくりと変化する自然の遷移によってできた多層群落の森が、究極的な植生の姿なんだということです。世界で日本はそのお手本のような国です。それでも、そうした本当の森は、国土のパーセントにも満たない。

木は人間をどう思っているのでしょうか。結局人間には炭素、Cを固定化することはできない。CO₂を酸素にできるのも、固定化した炭素で、生物の食料を作り出しているのも植物なんです。動物は寄生者に過ぎない。だのに、今の地球におけるこの傍若無人ぶりを、木はどう思っているのか」

教授の言葉を、休場は半分以上理解できていない。

「最高条件は、最適条件ではない。恐竜やマンモスの絶滅を例にとるまでもない。木だって同じです。競争、我慢、共生によってやつと生き延びている。」

友康君は、この木の話の森の前の主であった葉子さんに聞いたそうです。だから、自分も生きていられる、と彼は言っていた。

ました」

「友康さんは、一番天国に近い所にいる人のように思っていました」

教授は、遠い目で微笑んだ。

「残念ながら、楽になれば、破滅するんです。それが、生物のきまりでしょう」

「つまり、生き物は、天国には住めないということでしょうか？」

「まあ、いいじゃないですか。天国なんて、死んでから行く所なんですから」

教授は、カラカラと笑った。

休場は葉子の七回忌の後、友康のもとを訪ねている。友康も、東北の寒村で、自分が意識不明に陥っている間に、何が起こったのかを知りたかったのだろう。休場の訪問を受け入れた。休場は、笹原の見たこと、明彦が木を消し去った様子を説明した。友康は、じつと聞き入っていた。そして最後に、重い口を開いた。

「木は人間を恨んでいた」

友康はそう言った。

教授の答えは、このことであろうか？ 少なくとも、明彦に消された樹齢数何百年の木は、

(人間ごときに自分が切り倒されるなど、我慢ならぬ！)と憤っていた、という。

歩くうちに、母屋の外れ、桜の古木のある中庭に出た。

「この桜は、この土地の植生からは、随分と外れている。なぜこんなにも育ち、長生きなのか。人という種にも大きな個人差があるように、この桜も独自の何かを持っているのか……」

教授の説明の途中で、

「あっ！」

桜の陰から声が聞こえた。

「昨日と今日と続けて会ったね」

木の後ろから、亜子が姿を現した。いっしょに太郎も立っている。

「こんにちは」

太郎が、不器用に挨拶をする。

「へえ、二人は仲がいいのかい？」

考えてみれば、弓子は亜子を連れて、よくこの人たちの世話に通っている。ひとつ違ひの亜子と太郎が仲良くなつてもなんの不思議もない。が、休場はいやなイメージを抱いた。

嘉一郎と腹違いの姉芳江、葉子と笹原由宜、友康、明彦の関

係。この家は、そういった意味ではキチガイじみている。今、亜子と太郎も姉弟なのである。本人たちは知らないだろうが、濃い血に繋がっている。

「おじさん、いやらしい」

亜子のあつけらかなとした指摘に、休場はたじろいだ。

「太郎君とは、仲良しだけど、あたし年下はあんまりだめ」

古臭いおじさんと決め付けられた気がした。

「そうか……」

「あたしと太郎君じゃ、絶対似合わないでしょう。背もあたしの方が大きいし、どうみたって、あたしがいじめっこで太郎君がいじめられっこよ」

それは、かなり正しい見方だ。

隣りで、教授が大笑いを始めた。

「おじいちゃん、だれ？」

「稲垣恒夫という名なんだがね……」

教授は、ほとんど咽込みながら笑っている。

「そんなに笑うなんて失礼よ。あたし、いじめっこじゃないわ」

「自分でそう言ったんじゃない」

「そう見えるって言っただけでしょ」

「これ以上レディを怒らせる前に私は退散しよう。今日は楽しかったよ」

稲垣教授は、休場にそう言い残すと、さっさと、そして、飄々と去って行った。

「おじさんは、伽耶子おばさんにご用？」

「いや、雪那さんに会いに来たんだ」

「そっか、じゃあね」

亜子が走り出す。

太郎は、何か言いたげに休場の方を振り返った。

「太郎君行くよ」

巫子の急かす声に、太郎は何も言わぬまま、後を追って行った。

休場は、初めの目的通り、雪那を訪ねた。母屋の東にあたる離れに住んでいる。

この五年。雪那との関係は、海老沢や大悟とは、全く質の違うものになってしまった。笹原の周りで、情報を共有するものとしないうもの、守られるものと守るもの。はっきり二つに分かれた気がする。誰がどちらに入るかは、なぜか自然に決まった。

「海老沢先生、プロポーズを断られたって嘆いていましたよ」
休場がそう切り出すと、雪那の視線が微かに揺れた。

「海老沢先生では、だめですか？」

「だめなはずがないでしょう、立派な方だわ」

「でも、断った。それも好みじゃないって」

「そんな失礼な言葉は使っていないわ。朗君は、私が処女だって思ってる？ こんな私を抱く男なんかいるはずがないって」

（ここで、首を振って、そんなことは思わない、というのは偽善だろうか？）

雪那は、五年前の姿でも十分に化物だったが、今はもう、増殖し続ける瘤というタンパク質に押し潰される寸前だった。夜、仰向けに眠ったならば、自重で翌朝には息絶えていることだろう。休場の戸惑いの先手を打つように、雪那は言葉を継いだ。

「処女と思わない、なんて偽善者ぶった言葉を、あなたから聞きたいわけじゃないわ」

「相変わらず鋭過ぎますよ」

「私ね、本当にSEXしたことがあるのよ」

恐らく、雪那はそこでけらけらと笑ったのだと思う。普通の姿であるなら。

「それも好きな人と……」

なんのコメントも加えることができなかった。想像もつかないことだ。第一、彼女に好きな男がいるなんて、聞いた事もない。

雪那は、そんな休場にはかまわず、少しだけ空を振り仰ぎ、少しだけ、息を吐いた。

「人の中にある、意志って、なんででしょうね」

雪那がこんなとき、口にする言葉は、詩にかわる。とりとめがなく、聞き逃すまいとしても、大気を上滑りして、休場の脳までは届かない気がする。

「ニュートリノの微小と宇宙の大きさ」

微小にとつて、人間が固体にも見えないのなら

人間にも、宇宙は広がりしか見えない

なぜ、人はそんなにも中途半端なのに

自分たちの意志を固持するのでしょうか

意志はいたるところにあるかもしれないのに

休場は、あきらめた。彼女の云わんとすることは、わかる気

もするし、わかっていないのかもしれない。

雪那と出会ったのは、葉子の死んだ後だった。葉子は、砂漠の坊やこと塚田瑛佑を可愛がっていたように、この童話作家、納矢雪那のことも面倒みていた。雪那は、童話や詩を書いていくが、たいして売れてはいない。それで生活していけるわけではなかった。弟の大悟もまた、選挙にお金を注ぎこんでいるだけで、稼いではない。結局、二人の面倒をみているのは、葉子だった。葉子は、相手にそれを意識させないほど、いいパトロンだった。

いや、大悟と違って、雪那にはなにもかもわかっているのかもしれない。

（あなたが手を引いて、私が生きていけなくなっても、それは何もあなたの気にするんじゃないわ。だって、もともと私は一人では生きていけないように、作られているんだもの。神様のせいよ。神様がそうしたの。あなたのせいじゃない）

雪那は海老沢にそう言ったという。

瘤は、手術しても、手術しても、増殖していく。海老沢は手術を繰り返す。どんなに努力しても崩れていく、雪那というたんぱく質の楼閣は、人の心に負担を強いる。彼女にはそれが十分わかっている。

彼女の書くものは、不思議だ。

初めて、休場が読んだのは、恐竜の童話だった。恐竜の母親

が、小さなわが子に、食べることを教える。狩りではない。適切に食べるということを教えようとする話である。その巨大化し過ぎた体を小さくしないと自分たちは滅びるしかないのだ、と言いつける。子どもの恐竜は日々空腹を抱えて成長し、やがて自分の子にもその教えを伝えるが、結局恐竜は滅んでいくという、休場にとっては、なんでこんな話を童話にしなくてはならないのかよくわからないものだった。

次に読んだのも、わけのわからない草の話だった。彼らは、手をつないで、空から落ちてくる何かを待っていた。けれど、次の世代になっても、その次の世代になっても、その何かは落ちてこない。時を経て、その土地は海に沈み、やがて、草の子孫は、海の底から落ちてきたその陰を見る。それは、海面にヒラヒラと浮かび、流れて行く。何十年、何百年、何千年と待ち続けた草たちの繋がれた手は、海中で放たれ、狂おしくその陰を追う。けれど、月光の輝く水面に陰は遠ざかり、悶え苦しむように、草の手がそれを追い求めている。

というラストのシーンは、妙にインパクトがあつて、休場の脳裏に焼きついている。

それにしても、なぜ、こんな話ばかりを書く雪那を、葉子は見出したのだろうか。彼女は、化物の姿。彼女は、不思議な夢物語を紡ぐ。そして、葉子が雪那に課したのは「思い出す」ということ。

「そう言えば、大悟君はどうしてます？ 足は大丈夫でしたか？」

「ありがとう。あの子の大袈裟には、辟易なさっているのに、心配して下さるんですね。」

今朝早くに、緊急の呼び出しを受けて、登庁して行きました。いろいろと変わった弟ですけど、そういうところはちゃんとしてます。筋金入りの政治家だと、私は思っていますよ」

「その意見に反対する気はありません。先日の著書も読ませてもらいました。あそこまで、日本のあり方、というか、地球に対して、人間としてどういう関わり方をしていくべきかを、自信を持って主張できる人物はなかなかいません。彼の場合は、本気で主張して、本気で生きている」

「ありがとう。周りに迷惑のかけ通しで、なかなか我慢できるところのない弟だけど、そこだけは信頼してます」

外に天気雨が降り出したようだ。雪那の向こうのガラス窓に水滴が付いた。

疑 惑

内海たすくは、ある殺風景な一室にいた。

警察署長というポジションから、公安への配置換えを、左遷とみるかどうかは、もうどうでもよくなっていた。家族もあま

り仕事のことには、興味を持たないでいてくれる。その方が気が楽だ。

五年前、高野洋二という部下の姉の死に疑問を抱いた。調べ始めたが、仕事も私生活も忙しい時期だった。そこで勤務はわずか一年半で、たいして実を結ばない調査に終わった。

ところが、警察署長として赴任した次の勤務管轄地に、白居家があった。調べるほどに疑惑は深まった。

白居家というのは、いまや泣く子も黙るサクヤグループの前身である。明彦の姉は、創業に関わっていた。今、サクヤグループは、従兄である笹原由宜の時代となっている。白居家の三人の子は、まったくグループの資産を受け継いでいないし、彼らの両親は母親が二十七歳、父親が四十三歳という若死にだ。

なんとという好都合であることか。

そして、問題のその日、笹原由宜の共同経営者であった葉子が死に、すぐ隣の病院で看護師が死んだ。弟は、廃人となり、使用人が一人、大怪我をしている。ここに、どんな偶然を見つけたらいいのか。現場にいたもう一人の人物、病院長の海老沢悠一は、笹原と兄弟のように育っており、海老沢病院自体が、サクヤグループお抱えである。

満を持したように、笹原由宜は、サクヤグループを受け継ぎ、世界に名だたる企業に発展させた。葉子は、すべてを笹原に残していった。自分の子が生まれるというのにだ。

一体どんな筋書きなんだ。看護師は目撃者であつたかもしれ

ない。怪我をした使用人が、廃人となった弟の面倒を見ている。生活のすべての費用は用意されていた。それは、看護師の兄も同様である。そこにはどんな取引きがあったのか？

犯罪を憎んでいる、などと綺麗事を言う気はない。それにしても、この法治国家で、こんなあからさまなやり口を見逃していいはずがない。少なくとも警察官である自分が気付いたのだから。

警察署長より公安の仕事は、ある意味ハードだった。事件になってもいない犯罪の証拠、状況証拠ではない何かを手に入れる、そんな余裕はなかった。

そして、ある日その時扱っていた事件とは、何の脈絡もなく、突然、あるうことか監視総監に呼び出された。ビルの一室。警察および、それに関係する建物ではない。地理的には、国会議事堂に近い。わたくし企業のものとも思われず、といって、お役所的なところも感じられないビルの七階。

そこで、内海は、ユージン・ムーアと引き合わされた。警察のお偉方の前で内海は緊張していた。が、そのお偉方も、ユージン・ムーアのの前では、私語を交わすことも、姿勢を崩すこともなかった。そして、すぐに、内海は、そのユージン・ムーアに促がされて、二人だけ隣の部屋に移った。

閑散とした広すぎる部屋の真正面に座らせられた。そして、その日本語の上手すぎる外国人は、こう言った。

「私は、正義の味方です。」

滑稽な台詞でしょうかね。でも、私は、そう名乗ることにしているんです。わかりやすいですからね。私にはなんの私心もありません。

地球が消える、家族が消える。それを阻止することが使命だとしたら、こう名乗ってもいいと思いませんか？」

彼は、穏やかに微笑んだ。

「これを見てください」

ユージン・ムーアがそう言って、指差すパネルに、映像が映し出された。

日本の風景ではなかった。アメリカの映画のワンシーンにこんな場面があった気がする。青い空、気持ちよく広がる広場。大勢の人間が、わいわいがやがやしゃべったり、食べたり、飲んだり。子どもが走り回り、犬がそれを追いかけ。ピエロや、リスのようなあらいぐまのような着ぐるみもいる。画面の隅には、手を叩きながら大喜びでジャグリングを見ている集団。

「航空祭です。のどかなもんだ。基地関係者の家族を招いて、休みの一日を過ごす」

そう言われて見れば、遠くに見えるのは、滑走路だった。

次の瞬間、何の前触れもなく、映像が切り替わった。

ストーンと、空ばかりになった。地平線も見える。

いや、映像に仕掛けがあるのか？ 右も、左も、端の方は残っていた。どういったらいいのだろう。実際を想像しにくい。

映像という、二次元的な見え方だけでいうなら、両端、十パー

セントくらいは、そのままなのである。

パーンという乾いた音がした。

(銃声?)

「ユージン、ユージン、ユージン」

男が彼を呼んでいた。映像の中。姿は見えない。おそらく、このカメラを回している人間。その後は、早口の英語。何が起きたんだとか、ジーザスとか、どこに行くんだとか、内海の耳に聞き取れたのは、そんなところだった。

そして、映像は終わる。

「まあ、こんなものを見ただけでは、何も判断できないでしょう。こちらへ」

内海は、ユージン・ムーアに促がされて、別の個室へ移った。

そこも殺風景な部屋で、細長い机にうす高く積まれた書類、隣りには小型のスチール机があつて、ノートパソコンが置かれていた。

ユージン・ムーアが声をかけると、二人の男が入つて来た。

「この二人は、何も君がちゃんとこの書類とパソコンに通してお勉強するかどうか監視しようというわけではない。ここにある情報の重要性だと思つてくれたまえ。ここにある事実は世界中をパニックに陥れるかもしれない。管理されなければならぬ情報なんだ。」

何をどう信じるか、信じないかは、君が判断したまえ。我々の提示する判断材料はここにある。ちなみに、ここでの時間は

君の勤務時間の一部となる。手弁当での調査ではないよ」

それだけ言うと、ユージン・ムーアは部屋を去り、内海は書類やパソコンとともに、残された。二人の男たちは、部屋の出入り口に、椅子を置いて座った。

狐に抓まれたようだ。とりあえずは、その分厚い書類と、パソコンに落とされたデータに目を通すしかなかった。

それは、ある事件のすべての記録を集めたものだった。殆んどが英語で、重要な点をとりあえず日本語に訳した、という風だった。

概要は、核施設の爆発によって、近隣地域が放射能汚染された、というもののだが。規模が大きい。広島・長崎の比ではない。

(一体、いつ? ……三十年以上前……、それにしたつて、それほどの規模なら、日本の教科書にだつて載る類のものじゃないか? でも、そんなもんは、読んだ覚えがない。

原因。テロ??? テロつていつたつて、どこが、どうやつて?)

椅子に座つていた見張り番らしき男が、コーヒーを机に置いてくれた。ほっとする香りだ。

「ありがとう」

時計を見た。二時間たつていた。それでも、恐らく百分の一も目を通してはいないだろう。膨大な資料だ。事件の本質よりも、それに対して、米国政府がどのように手を打ったかが、克

明に記されていた。それは、ある意味、事件の本質に手が届かなかったということ。届かぬまま、あるいは届かなかったからこそ、規模の大きさを隠して対処せねばならなかった、関係機関の苦悩が伺えた。テロというなら、どこのテロなのか。どういう手段がとられたのか。何も決め手がなかった。何の発表も出来なかった。やみくもに、放射能汚染を振りかざして人々を遠ざけた。

幸いしたのは、被害面積のわりに、それを隠蔽しやすい場所だったことだ。核実験の行なわれていた砂漠、N A S Aの前身となる航空宇宙局の実験施設、そして幾つかの隣接する先住民居住区。一族、一家、すべてが死に絶えたものが多かったであろう。核施設、航空局職員の子孫には、国家機密というフレーズを盾にした。問い合わせをうやむやに誤魔化したものもあつたようだし、実際、遺族への支払いを行なっている例も記載されていた。

いや、それより、この事件を隠蔽出来た最大の理由は、生存者のいないこと。放射能汚染と言いながら、被曝者ではなかった。目撃者もなければ、爆発をしめす、残骸さえほんのわずかだった。建物の残骸の話ではない。遺体さえもなかった。

その街は、その都市は、人の記憶の中になしに残らなかった。すべてを消されたのだ。

「話を補いたいのだが、いいかな」

ユージン・ムーアが再び、部屋に戻って来た。二人の男たちは席を外した。

「その前に、なぜ自分にこんな資料を見せたのかを教えてください」

「話はどこから始めてもいいんだが。君はさつき、なぜこの仕事は手弁当ではないと私が言ったのか、考えたんじゃないかね」
「はい」

その通りだった。

「私の手元の資料通り、君は本当に慎重な人間だね。ここまで言っても、なぜ、そう思ったのか、君の持っている情報をべらべらしゃべったりはしないわけだ」

「はい」

「気に入ったよ。さつきも言ったように、私は正義の味方だからね。やましいところはない。なんでも君に説明しよう。ただ、君も私の信頼に答えて欲しい。このことを知る人間は少ないとも言えるし、多いとも言える。問題の規模からいったら、世界中の人間が知っていてもいいことだ。それを、我々だけが握っているのは、この戦いを不利にしないためだ。私たちは、負けることの出来ない戦いをしている。」

事件が起きたのは、三十三年前だ。ある兵器によって、千二百平方キロメートルの土地から一切が消えた。最後には、そこにあつた核物質が爆発した。まあ、入れ物から、冷却水まで消えたのだから当然だろうが。結局、米政府は、臨界核実験の

失敗と発表した。

しかし、わずか三十三年前の、それほど出来事が、何もわからないまま放置されるなど、どれほど恐ろしいことかわかるかね。もし、人口密集地、仮にこの東京でそれが起きたら、日本は壊滅することになる。

世界の人口を減らしたい、他民族を根絶したい、そういう不屈きな輩がいたとしても、もし、自分や家族、自民族が根絶される側に回るのだとしたら、避けたいだろう。

そういう意味では、世界の利害は一致している。私は、今君に見せた資料を持って、世界を説得して周り、おおっぴらではないがひとつの組織を作り上げた。世界を消え去ることから守る組織だ」

内海は、ユージン・ムーアのよどみのない日本語を聞きながら、いかかわしさを探していた。話の突拍子なさが、一番いかかわしいかもしれない。

「その話をどうして私に持ってきたのですか？」

内海はその疑問を繰り返した。

日本で何人の、どこまでの人間が、ユージン・ムーアの話す組織のことを知っているのだろうか。自分のようなものにも、そんな大組織の長が、会って説明するなど考えにくい。

「君が手弁当で調査していた白居家が、このテロの張本人だ」

無事に家に帰りついたときには、全身から力が抜けた。内海

は自分がどんなに緊張していたかを知った。とんでもないことに巻き込まれた。それが、一番の思いだ。犯罪と戦ってきた。しかし、それは、こんなばかばかしい、世界征服を相手にしていたわけじゃない。

ユージン・ムーアを詐欺師と言えたらどれほど楽か。けれど、内海を彼に引き合わせたのは、内海の属する国家権力だ。そんな暴言は吐けない。ユージン・ムーアの言葉がどんなに馬鹿げている、本当のことだと信じるしかないのだ。

最後に、ユージン・ムーアは、彼自身の歴史を付け加えた。ユージン・ムーアは、母の勤める航空局のイベントに、ビデオカメラを持った友人と共に、参加した。あの映像は、ユージン・ムーアの友人が撮ったものだ。彼らは航空局の敷地の南の壁を背に立っていた。

その兵器は、彼らのすぐ目の前に置かれた。なんの衝撃も音も気配もなかった。あの映像そのものだ。突然場面が切り替わったように、何も無くなった。自分の目を、脳を疑うしかない光景だった。ただ、疑いようもないのは、映像の両端十パーセント。兵器は、ただ前面、それも百八十度ではない、人間の視野のような広がり方で、力を発揮した。ユージン・ムーアとその友人、南側の壁の前に立っていた人、そこから左右のわずかな死角に当たる部分にいた人々だけが、無傷だった。まるで、額縁に入った絵の真ん中をベリツと剥いだような光景だった。

ユージン・ムーアは、その後すぐに、このことを連絡しよう

と地下の通信施設に降りた。カメラを持った友人もあとを付いてきた。そこで、核施設の爆発が起こった。ユージン・ムーアと友人とカメラの映像だけが残った。

一瞬にして、大半が消え、額縁に卡ろうじて残った風景も、核爆発によって、木っ端微塵になった。

こんなとてつもない破壊。それに白居家が結び付くまでには、ユージンの組織が調べ上げた数々の証拠が積み上がっている。そして、内海が追い続けた事実を構築していくと、それもまた、サクヤグループ、笹原由宜にたどりつく。

あの日、内海は、叔母の夫と初めて会った。その豆腐屋によって、白居家を知った。そして、白居家の中庭で桜の花弁舞う幻影を見た。この腕に抱き上げた若者が、謀略の毒牙に罹った者ならば、放っておくわけにはいかない。いくつもの偶然に導かれた己の運命がここにある。

いくら上司に進言しても、取り上げられなかった白居家の事案。確かに初めは、事件にもなっていないことをほじくり返して、煙たがれているのだと思っていた。が、調査すればするほど、妄想だと思いつつもうとしていた逃げの部分が消されていく。その上、白居家の周辺で、自分と同じ臭いのする連中と何度も遭遇した。極めて特殊な捜査部隊が白居家を調べていると感じた。

だからこそ、さつき資料を読みながら、自分が選ばれたのは、

白居家に関係するからではないか、という思いが頭を過ぎった。手弁当云々の言葉尻ではない。

太 郎

太郎は、誰に相談したらいいのかわからなかった。

亜子は、太郎にとつて、ひとつ違いとは思えないほどの、大人の言葉と判断力を持っていた。それでも思春期にさしかかろうという男の子の、少々マザコン気味な相談にのるのは、無理だった。

かわりに、

「ねえ、これ見て」

パソコンの動画サイトに面白いものを見つけたという。それは、コンビニの防犯カメラに写っている二人の男性だった。一人が入り口にじつと立ち、もう一人が買い物をしている光景だ。動画のあとに、携帯で撮った、ドア付近に立つ男のアップが何枚も続く。不思議な印象。何も見えない目。華奢すぎる体。人形のような無表情。それなのに、彼が何かを悲しんでいるように見えるのは、なぜだろう？

太郎には、見覚えがなかった。

「あやしうい・ふ・た・り、ってタイトルなんだけど、すごいアクセス数なんだって。クラスの子が見せてくれの。太郎君本

当に全然わからない？」

「……」

「私、すぐにわかったのになあ。これ、私のお父さんだと思うよ。」

太郎君が悩んでいるのがこの人のことなら、会いに行ったらいいよ。ほらほら、もう一度、戻すからよく見て。こっちの買物してる方が、友康おじさんだよ。たまに、葉子おばさんにお線香あげに来る。おじさんもそつと来るし、伽耶子おばさんも太郎君に会わせないようにしてるから、わかんないだろうけど」

「どこに、会いに行けばいいの？」

「だいじょうぶ、そんなに遠くないよ。あたしの友だち探偵団が、どこのコンビニか調べてくれたから」

そこに立って三日目、太郎はやつと友康に会えた。亜子がいっしょにいてくれたのは一日目だけ。いつ来るかしれない相手をぼんやり待っている暇などないと、次の日からは、一人で行かされた。

現れたのも、友康一人だった。何度も映像を見てきたので、間違いないとは思ったが、声をかけるには、かなりの勇気が必要だった。それでも、三日待ち続けたという思いに押された。

「白居太郎です」

そう名乗ると、

「ずいぶん、大きくなったね」

静かに、そう答えられて、心底ほっとした。

白居明彦に会いに来た事を話した。相手が、何も言わないので、亜子が、二人の映像をネットで見つけて、ここで待っていたのだと説明した。

「そうか、この頃、なんか変に人がこつちを見ているのが気になって、明彦君を連れてくるのは止めたんだ」

亜子は、映像をネットに流したのは、コンビニのバイトの子だろう、と言っていた。友康と明彦の二人は、目立つ。どういう関係かも、不思議だろう。下衆に勘繰るのが楽しいのかもしれない。

歩いているうちに、家の前に着いた。樋山という表札。今は明彦の住む家でもある。

「小さいときのこと、覚えてるか？」

太郎は、こくりと頷いた。

「覚悟してきたってことか？」

太郎は、もう一度頷いた。

鍵はかかかっていなかった。友康は、引き戸を開けて、中に入り、太郎を振り返った。太郎は、握り締めた手の中に、汗がたまってくるのを感じていた。友康は、急かす事はしなかった。靴を脱いで、上がっていく。広い家ではない。玄関からまっすぐ繋がる廊下の先に、中庭の陽の光が見える。明彦はいつも、中庭に面した濡縁に座っていると聞いた。

太郎は、ゆっくり靴を脱いで、上り框に足をかけた。心拍数が上がっていく。屋内の廊下はひんやりと薄暗かった。右に台所や浴室に入るガラス戸があり、左は部屋の襖になっている。

足の裏に、古い木肌を感じながら歩いた。歩く一歩ごとが、微かにみしみしなった。木の体内にいろような、湿気と薄暗がり、と静けさ。胎道を進むような細い廊下。

廊下を抜けた。部屋の敷居をまたぐ。陽の光に目を痛めつけられた。中庭に面したその部屋は、外界と繋がっていることを誇示する。光に満ちている。

縁側に背中が見えた。外気と光に包まれて、陰になって見える。ゆっくりこちらへ振り返る。動悸がした。耳鳴りがした。

(だいじょうぶだから)

自分で自分にそう言い聞かせた。

振り返った顔も、陽の陰になつていて、見えにくかった。めまいがした。足元が、ふわふわとたよりない。

誰かが手を握ってくれた。少しひやりとした手。視野が定まると、友康がすぐ側にいた。

「座ろう」

ゆっくり、太郎の手を持って、座らせてくれる。

「ありがとうございます」

太郎は、礼を言った。そして、もう一度明彦を見る。目が光に慣れて、その顔立ちを知ることが出来た。伽耶子に似ている。

特に、不思議な光を宿した目が似ている。何を考えているのか窺い知れない。たまたま、視線を外せなくなるオーラが似ている。

「大丈夫です。もう、倒れたりしない。だから、伽耶子にこの人を返して下さい」

「それが、僕たちを捜し当てた君の用件なんだね」

「伽耶子は……いえ、僕のかあさんは、白居の家から出ません。

ほとんど部屋に引籠もったきり、一日ぼんやりしています。僕はもうどうしたらいいのかわからない。かあさんが、どんなに

明彦さんのことを好きか、子どもの頃からずっといっしょにいた話を、いろんな人から聞きました。そして、僕が小さい頃、明彦さんを見て倒れた話も。だから、友康おじさんは、白居の

家に明彦さんを連れて来ないんだろうって、タズさんも言っていました。

もう、僕は倒れたりしない。だから、かあさんに明彦さんを返して下さい」

友康は、明彦を振り返った。まるで、二人の話に耳を傾けるかのようにこちらを見ている。でも、何も聞いてはいないのだ。

「太郎君、君は、誰にも言わず、黙っているんだね」

友康の言っている意味がわからず、しばらくじっと彼の次の言葉を待った。

そして、突然何を言われたのかに気付いて、太郎の表情が怯えた。

「覚えているのは、小さいときのことだけじゃない」

太郎は、聞きたくないと言うように、耳を塞いだ。

「生まれた時のことを覚えてるんだね」

太郎の体は、硬直していた。それでも、息することを繰り返して、

（もう僕は、だいたいようぶだから）

と、繰り返し返す。

「僕は、大丈夫だから、かあさんに明彦さんを返して下さい」

太郎は、必死だった。

普通より、少し年若い母であった。自分のことを『お母さん』ではなく『かやく』と教えた。そんなことぐらいだ。それ以外は、全部普通だった。幼稚園のときも、小学校に入学した時も、わが子を可愛がる普通の母親だった。なんにも、人と違うことなんかなかった。だのに、太郎が十歳になった頃から、少しずつ歯車が狂い出した。逸脱していった。

人が伽耶子の周りに集まり始めた。いや、伽耶子の中の何かが変化したから、そうなったのか。いつもいつも太郎に注がれていた視線が宙を見ている。目の前になんか見えていない。たくさん見えていた。あんな森は伽耶子の視野にある。視野はどんどん広がって行く。伽耶子の目を、人は感じる。それを感じる人々が集まって来る。

でも、そうやって人が集まっても、伽耶子は一人だ。

（僕ではだめなんだ）

と太郎は悟った。

伽耶子の傍らに立つことの出来る人間は、明彦しかいない。

伽耶子の側がわにいるのは、明彦だけ。

（僕はそちら側ではなかった）

けれど、友康の答えは、太郎の言いたいこととはかけ離れていた。

「生まれてすぐの君に向けられた殺意を、伽耶子さんも君も明彦君のものだと思っている。それでいいと思ってた。でも、そのせいで、伽耶子さんは看護婦の死に責任を感じてしまった。訂正すべきだったのかもしれない。」

明彦君の力は、彼の意志で使えるようなものではない。いや、もともと彼が、大きな恨みや憎しみを持つ人間になったら、使えるのかも知れない。でも、彼は人の死を悲しんでも、人を憎む心は持っていない」

「どういうこと……」

「彼の母の死、父の死、姉の死、看護婦の死、つまり君に向けられた力、そして、休場さんに向けられた力でさえ、明彦君の力が明彦君によって使われたわけではないんだ」

「そんな」

「葉子さんが一番恐れていたのは、明彦君のそばで、強い憎悪の育つこと」

「ごめんなさい、僕にはよくわからない」

友康は、少年の顔をじつと見た。

まだ、小学生なのである。伽耶子を元の優しい母に戻せる人間は明彦だけだと信じてここを訪れた。明彦が、伽耶子から遠ざけられているのが自分のせいだと思えば猶更、どうにかせねばならないと勇気を奮ったのだ。

こんな話をぶつけられても、答えようもないだろう。

「すまない。でも、これだけは、覚えておいて欲しい。君がその体の奥に、振るわれた力を覚えているように、明彦君も体の奥に、振るってしまった力を覚えている。それが自分の意志でないからこそ、彼の心も体も、急ブレーキをかけて、キリキリと軋むんだ」

「亜子ちゃんが、友康おじさんは、お父さんの心を眠らせているんだって、言っていました」

「あの子がそんなことを」

亜子が、笹原家に引き取られたことは、聞いていた。何度か白居家で姿も見かけた。しかし、彼女が明彦を見たのは、六歳のあのときだけのはず。なのに、映像の写真ですぐにそれを自分の父親だと言ったという。そのことに、友康は不安を感じた。亜子にとつての真実は、どんな姿をしているのだろうか。

明彦を白居家に帰すことについては、もう少し考えさせて欲しいと、友康は言った。

太郎を送って、駅まで歩きながら、友康は自分のことを話した。太郎の慰めになるかどうか、わからなかったが、葉子が自分を救ってくれたように、太郎のことも助けたかった。

「おじさんには、生まれるもつと前の記憶があるんだ。お腹の中にいたとき、おじさんの隣りにはもうひとりの赤ん坊がいた。手も足も目も鼻も耳も口もない赤ん坊だった。お腹から出る暗いトンネルがその子の頭の上にあつて、周りの壁に押されてその子の体は、ゆっくりとそこへあがつていこうとしていた。ところが、その子にはわからなかったかもしれないけど、おじさんにはそのトンネルがもう壊れようとしているのがわかった。一人通ったら、崩れてしまう。残されたもんは、二度とここから出られない。」

だから、おじさんは、その子を押し退けて、必死で外へ向かった。その子は暗闇に飲み込まれるように落ちていった」

太郎には、何の言葉も発せない。

「そんな記憶はあるのに、生まれてからの記憶はあまりないんだ。いつもいつも、子守唄を聞いていた。白居の森に住むようになってからも、ずっと闇に落ちていった赤ん坊の夢を見た。森の木に触れて、葉擦れを聞いて、木漏れ日を浴びると、すまなくて泣きたくなった。」

そうしたら、まだ小さな少女が現れて、こう言うんだ。

『いいのよ。いいのよ』

そして、僕の頭を手をおいて、いい子いい子をした。僕は赦

されたんだと思った」

「それは、だれ？ 伽耶子？」

「いや、葉子さんだよ」

友康は、微笑んだ。

「それからしばらくしてから、森の木に登っていたら、海老沢病院の窓辺にその時の赤ん坊を見つけた。違う誰かなんだろうけど、そう見えた」

友康の表情は、明るく穏やかだった。

「毎日木の上から見ていた。彼女は、手や足を失っていたけど、見ることも、聞くことも出来なくなっていたけど、静かに生きていた」

沈黙になった。

「それから？」

太郎が尋ねた。

「うん？」

「その子は誰だったの？ どうなったの？」

「知らない。誰だか。どうなったのか」

「知りたくないの？」

「考えてもみなかった」

二人は駅に着いて別れた。

太郎は、家に帰ると足音を忍ばせて自分の部屋に向かった。

夏休みとはいえ、家を空けすぎることやタズに注意されている。

伽耶子の部屋の前の廊下で、呼び止められた。いや、声はない。襖を開けて中に入る。伽耶子はいつものように、奥の丸窓の手前に座っていた。太郎は目が合った瞬間、今、太郎の経験したすべてが、伽耶子の中に入っていくのを感じた。

(友康がそんなことを言ったの)

伽耶子の声のない言葉が太郎に伝わる。

明彦は、伽耶子がすべてを読み取るので、声を忘れたが、伽耶子は相手にすべてを伝えることができるので、声を忘れる。

「海老沢病院の手足のない子って、誰ですか？」

太郎は、思わず聞いてしまった。

(答えて欲しいの？)

そう伽耶子に問われて、首を振った。

太郎は、本当は、伽耶子のその何もかも見える力がいやなのだ。だから、伽耶子に何も聞きたくない。友康のことも、明彦のことも、聞いて答えてもらえないことより、聞いて何もかも見透かされることの方がいやだった。

いや、こうして隠れて、苦勞してやっとなり成し遂げたことも、

一瞬にすべてが伝わってしまうのは、やりきれない。

この森の人々はいい。家族ではないのだから。誰も伽耶子と親しいわけではない。伽耶子を崇拜しているだけだ。彼女としゃべるのでさえない。ただ、遠目にその姿を眺め、伽耶子の発するオーラを感じとるだけだ。

伽耶子はいつでも一人なのだ。明彦がいらない限り。

「伽耶子が、ここを出て、明彦さんの所へ行けばいい」

太郎は、口に出して、震えた。伽耶子がいなくなったら、ここはどうなるのだろうか。

(絶対にいやだ!)

この森には、いろんな人が住みついている。森の周辺に住み始めた人々もいる。日本人もいる。黒い、白い、茶色い人々もいる。毎日、花や食べ物や門のところに置かれている。

遠くから歌の聞こえる日もあった。異国のイントネーション。だのに、それは日本の昔の流行歌で……

『そこに行けば どんな夢も叶うというよ』

だれもみな行きたがるがはるかな世界

その故郷の名は ナサート どこかにあるユートピア

どうしたら行けるのだろうか 教えて欲しい

ナサート ナサート they say it in TOKIO

ナサート ナサート 神の国 ナサート』

最後の部分が替えられている。

太郎は、聞いていると悲しい気持ちになる。誰かがこの歌を遠い異国で、日本人とは違う顔をした人々に教えたのだろうか？ おまえたちの夢は、ナサートに行けば、トキオに行けば叶うと。歌は、この東京を歌うけれど、自分のユートピアはどこにあるのだろうか。

太郎にとってのユートピアは、過去にある。伽耶子が、やさしい母親だったころ。かぐや姫が月を恋うるような、天女が羽

衣を求めるような、そんな顔をしない、普通の母親だったころ。なぜだろう、伽耶子は、母であることも、人であることも、やめてしまった。

丸窓の障子は、少しだけ開いて、空の青と緑の陰を映している。伽耶子の横顔は、今見てきた明彦に重なる。白くすべらかなで、体温を感じさせない肌。絵のようによくつきりと背景から浮き上がり、空間の密度を濃くする横顔。

神の国

内海たすくは、深夜の路上で、遠くから流れてくる歌を聞いていた。約束の時間を二時間過ぎている。

(またか)

引き上げることにした。白居家に潜入した仲間が、そのまま戻らない、正確に言うなら、後日戻ってきて退職届けを出す、そんな場面にこの半年で、四回も遭遇している。

オカルト宗教集団のような恐さだ。

といって、彼らがその後、白居家に関わっていくというわけではない。まして、人間的に破滅するとか、家族を捨てるということでもない。四人とも、一般社会人として普通に生活している。いや、もともとエリートなのである。再就職先にも困るわけではない。

そのうちの一人、土屋とは、三ヶ月ほど前に、ユージン・ムーアからの指令で会った。偶然を装って、いつしよに深夜まで飲んだ。これといった手応えはなかった。慣れない仕事は大変だとか、高校生の息子が反抗期だとか、日本の政治は二流だとか、はては、彼の趣味の音楽の話になった。

「そう言えば、あの屋敷で張り込んでた時にも、よく歌声が聞こえてたな」

と核心に触れてみた。元敏腕刑事だったその男は、別に何の警戒心も見せず、

「あの屋敷？」

と聞き返した。

「白居家だよ」

「そう言えばそうだったかなあ」

内海が拍子抜けするほど、土屋は、彼の最後の仕事にこだわりをみせなかった。

「なんで突然刑事辞めたんだ？」

内海は率直に聞いてみることにした。

「前から考えてはいたんだ。別に、突然じゃないんだよ」

「白居家の調査に関係あるのか？」

「ないよ。全然」

「だって、お前の後、吉野も辞めたんだぞ」

「偶然だろ」

「そんな偶然ありかよ」

「当の本人が言ってるんだ、間違いないよ。」

俺はさ、自分で言うのもなんだけど、もともと手先が器用なんだ。で、時計が好きで、いじるのばかりじゃなくて、眺めるのもな。結婚前の金が自由になったころは、かなり高いやつなんかも買ってたんだ、けどな、子どもが出来て、養う人間が増えるとなかなかそうもいかないだろう」

「それ、退職と関係あるのかよ」

「あると言えばある。ないと言えばない」

土屋は戸惑った。内海にそう聞かれても、何をどう説明すればいいのかわからない。土屋にとつて、自分に起こった心の変化は、白居家とは無関係なのである。

白居家に潜入するのは簡単だった。ホワイトハウスや総理官邸に入ろうというわけではない。あの家は、浮浪者やボランティア、意味もなく住み着いている人々がいて、それこそこれらの公園に立っているより、余程目立たない。お互いに関心がないう。逆にプライバシーもない。妙に全員が全員の視野に入っている。もし、ここで自分が倒れでもしたら、すぐに誰かが駆けつけてくれる気がした。逆に、誰かに危害を加えようとしたら、止めに入る人間のいる気がした。

そんな森で、木の下に立ち、当主の伽耶子を見つめながら、数日を過ごす、大好きだった時計の音が聞こえてきた。ゆるやかな時を刻む音。時が、時間や空間を作っていく音だ。楽し

かった。人に説明できるものではない。

だから、警察を辞めた。子どもの頃からずっと自分の中にあつた心の声に従った。白居家の捜査とは関係ない。

今また、連絡を絶ってしまつた同僚がいる。

(五件目にならなけりやいいが)

土屋のように、捜査を投げ出してしまつたのかもしれない、と内海は思った。

(とりあえず、本部に報告を入れておこう)

「ああ、これ以上待つても無駄だと思う」

帰途についた。

近くのコンビニで浮浪者らしき男たちが、酒盛りをしていた。

二人の男は、楽しげだった。何度も乾杯をしながら、肩を組んで笑い、歌い出した。それは、あの歌だった。

内海は、コンビニに入り、立ち読みをしている何気ない風で、二人を観察した。一人はありえないことに、衆議院議員の開眼大悟だった。

(奇人変人の噂は聞いているが、ここまでとは)

別に、珍しい歌ではない。この日本で流行していたのだから、

ある年齢以上は、みんな普通に知っている。それが、異国のインターネットで流れてくるから気になった。いや、いまだき、生の歌声が街角に流れてくるのが変である。子どもだって、道を歩きながら歌など歌ってはいない。

周りを見回した。どんな奴かは別にして、少なくとも閣僚である。SPがついているはずなのだが。それらしい姿はなかった。税金の無駄使いだと、開眼大悟が強烈に抗議した話は聞いているが、だからつけないでいいとは思えないが。

二人は、やがて別れて去っていった。開眼大悟が白居家に借りしていることは知っている。一応、後を尾けた。大悟は千鳥足のまま、白居家の門を入っていった。門柱の所には、袋に入った豆や米、野菜の類が置かれている。まるで、道祖神やお狐様を祀った祠の前のようだ。張り込んでいるときに、何度もこの光景は見ている。これらを持つてくる人々は、千差万別、男も女も、子どもも老人もいた。人種でさえ、ばらばらだった。ただ、みな一様に貧しげだった。

白居家の森は変わらない。サクヤグループの経済界での成り上がりなど知らぬ顔でいる。いつからの森なのか。どれほど老いた木々なのか。そこに住む人々も、その木と同じように敬意を持つて見られているのだろうか。だとしたら、それが間違いないのだ、と内海は思う。盲目的な信頼は、真実を覆い隠す。この森に巣食う人間が、何をしかさそうとしているのか、人々の信奉を隠れ蓑に何を企てているのか。警察官という職を選んだ自分には、戦う責任がある。

内海は踵を返した。

車は少し離れたコインパーキングに止めてある。

深夜の住宅地から繁華街の駐車場に向かう。建設中の建物が

多い。まだ使われていない地下鉄駅からの出口もある。地下鉄工事は、この五年かなり急ピッチで進んでいるらしいが、それでも地面の下を掘るなんていうのは、大仕事だろう。

大体、この地下鉄については、岩盤調査にミスがあったとかで、大幅に路線も駅の位置も変わっている。だから、余計に時間がかかっているのかもしれない。周りに建設中の建物が多いのは、突然ここに駅ができることになって、土地買収やらにやら、いろいろな人間の欲がからんでいるからだろう。

そう言えば、駅名で揉めているという話も聞いた。現町名、昔からの地名、集客を狙う寺の名前、市ぢの名前、とてつもなくいろんな組織の思惑が錯綜するものらしい。集団の利益の奪い合いということか。今のところ、駅名はカツコ飯のついた花里はなになっているとのことだ。

二日後、内海に待ちぼうけを食わせた同僚は、退職していった。五件目。もう偶然なんて言葉は使えない。作戦の練り直しが必要だ。

ユージン・ムーアに呼び出された。

(またか、この忙しい時に)

すでに何度か、ある意味の昇格を打診されている。が、この件に関する限り、現場を離れる気にはなれなかった。再三断っている。

部屋に入ると、ユージン・ムーアが待っていた。

のんびり窓の外を眺める風情は、仕事中心とは思えない。

「私は、今年六十九歳になるのだが、年よりずっと老けて見られるよ。座って、友人として話を聞いてくれないか」

「はい」

まさか、手短かに話してくれ、と言えるような立場にはない。

「この組織は、日本の警察やアメリカのFBI等とは違う。私が三十年以上かけて、あの破壊について調べ、資料を作り、それを何万人もの人々に見せて築き上げてきたものだ。仕事の内容上、ボランティア活動のようなおおっぴらなものには出来なかつたが、精神的にはそんなもんだと、私は思っているよ」

「はっ？」

どんな相槌を打つたらいいのか、全くわからない類の話だ。

「核兵器を世界中が監視している、そんなふうには、明白な何かであれば良かった。あの砂漠での凄まじい破壊を見ていなかったら、私にこんな力が湧いてくることはなかったと思う。二度とあんなことがあつてはならないという思いだけが私を突き動かした。」

それでも、時というのは、人にいろいろなことを忘れさせる。

何度も、自分のしているのは意味のないことではないかと疑った。あれはなにか科学的に説明のつく出来事だったのでないか、あるいは、未知の自然現象で、時間がたてば解明されるのではないかと」

ユージン・ムーアの本音が、いや弱音が呟かれている。

「なぜ君なのかを話したい。」

私は、部下の報告から、君が一人で白居家の事を調べているのに気付いた。あちこちでニアミスがあったようだね。警察署長という忙しい公務の中にあつて、ずいぶんと変わった人物だと思つたよ。起きたという確証もない犯罪を調べるのは、馬鹿げたことだとは思わなかつたかね。私のしてきたことと似ているんでね、心惹かれた。

この組織は、そういった意味では、年功も序列もない。荣誉も出世もない。国というものに属しているわけでもない。各国のお情けでそこに足場をおいているだけだ。資料を見せた総理や大臣、自衛隊、警察官僚がこちらの交渉に応じて、ここを提携してくれたが、政権が変わればどうなるかわからない」

内海の頭に、白居家に入つて行った開眼大悟の姿が浮かんだ。確かに、政権が変わつたら、協力どころかこの国そのものが敵に回るのかもしれない。

「本題に入ろう。私の力を君に譲りたい」

「えっ？」

「こんな唐突に言つてもなんだろうが、時間をかけてゆっくり引き継いでいって欲しい」

内海は、延々ユージン・ムーアとの毎日を過ごすはめとなつた。まるで、社長見習いにもなつたようだった。警察署長時代のように、対外交渉、事務処理、部下の監督等、雑務に追われた。それも、組織は世界中に広がっている。

が、確かに選りすぐりの有能な人間が集まっている。馴れてくると、数人のブレンが効率よく仕事をこなすので、上手く雑務を振り分けることが出来るようになった。

ユージン・ムーアは、仕事を教えながら、少しずつ、対外向けデモンストレーション用ではない真実を話し始めた。

「私が生まれたのは、今よりずっと生活の中に機械のない時代だった。それでも、父は航空局で技師をしていたし、母は医者だったから、普通の家庭よりは科学というものに近いところで育つたのかもしれない」

ユージン・ムーアの幼い頃のイメージは、典型的なアメリカの地方都市に生活する家族だった。父親の勤めも含め、その町全体が基地に依存してはいたが、閉鎖的ではなかった。隣接するインディアン居留地との交流や、森林を警備するあるいは、伐採する人々との関わりもあった。

ユージン・ムーアの母親は、初め町医者として働いていた。子どもに対して、差別することを厳しく戒める人だった。学校も基地内ではない、町の学校へ行かせた。そこには、インディアンの子どもたちもいた。そして、インディアンに似た面差し

の少女に出会った。彼女は日系三世だった。夫婦で森の番をし
ている家の子だ。

半世紀以上前の彼女の様子をユージン・ムーアは、いきいき
と語った。彼の初恋、インディアン少女のように長い髪を編
み、誰よりも高く飛び、誰よりも早く走り、きれいな声で歌う。
ユージンばかりではない。男の子も女の子もみんな彼女のこと
を好きだった。彼女はリーダーで、みんなを率いた。彼女の遊
びは、スリリングで、ロマンチックで、みんなに一体感を与え、
みんなを満足させた。

十三歳の夏休みの始め、彼女とユージンたち六人は、親に隠
れてリュックを背負い、山の頂を目指した。森は深く、山犬の
遠吠えが聞こえた。心は、誰も成し遂げたことのない冒険に向
かう勇士だった。が、道に迷った。怯えるもの、泣き出すもの、
もう歩けないというもの。皆置いて、残ったのは、彼女とユ
ージン二人だけだった。

森の中の闇は、目の前の枝も、避けることの出来ない濃さ。何
処まで続くのか、いつまで続くのか。自分たちの見えない目が
恐かった。だのに、野獣の目には自分たちが見えている。そう
思うと、次の一步を踏み出すことも恐ろしかった。それでも、
もはや進むしかないのだ。彼女は、怯まない。彼女は、退却し
ない。だとしたら、ユージンもそれに従うしかなかった。

闇、恐怖、押し掛かる影、閉塞感。
それは、突然、終わった。

森を抜けた。頂きは、天に届く開かれた大気だった。星降る
地には、光がある。光は、恐怖を打ち払う。彼女は、高みに駆
け上り、宇宙に向かって両手を広げた。

(さあ、ここに降りて来い)

気が満ちて、星の瞬きが鳴る。ユージン・ムーアは、美しさ
に息を呑んだ。

その夏、彼女は妊娠した。

森に大人たちが集まった。夜、心配で仕方なかったユージン
が、彼女の家を訪ねていこうとすると、焚き火を囲んで、シー
ンと何もしゃべらず輪を作った大人たちがいた。いつまでも、
彼らはじっとしたままだった。ユージンは、恐くなって、その
まま逃げ帰った。家には、父も母もいなかった。あの輪の中に
いるのだろうか、そう思うといつまでも眠れなかった。

彼女がその後どうなったかの記憶がない。大きくなったはず
のお腹は？ 子どもを産んだのか？ 墮ろしたのか？

思春期に入り、子どもの頃のように、遊ばなくなった。高
校・大学に向けての勉強に追われた。学ぶことそのものの魅力
に取り憑かれた。学問という道が、ユージン・ムーアに適して
いたのだろう。

三十代後半からは、大学の研究室で、分子生物学の雄となり、
多忙を極めた。

そして、ある日、父から連絡が入った。母が、精神を病んだ
という。六十歳を過ぎて、気丈で、信念の人であったユージン

の母は、壊れ始めた。

なつかしい風景の中を走る汽車に乗った。故郷の家で、父と母は待つていた。ぼんやりソファに座る母。父は息子にすべてを語った。

「私の初恋の人は、赤ん坊を産んで、亡くなったのだそうです」
ユージンは、夢見るように話した。

出産に立ち会ったのは、ユージンの母だった。生まれたのは双子。正確には、一人の赤ん坊と、一つの肉塊。

肉塊には、手も足も目も鼻も耳もなかった。かろうじて口と思しき器官を開いて、ひいひい泣いた。音にもならない泣き声だった。

「そうした子は、すぐに死んでしまう。むしろ、その姿を母親に見せるのは、精神的に悪影響がある。死産ということですから、死ぬまで放置する。それは、特別なことではない」

父はそう説明した。けれど、そうはならなかった。

母が反対したのだ。彼女だけではない。そのとき、まわりにはいた人間たち。航空局の人間、インディアン居留地の人間、町の人間、男女人種年齢を問わず、なぜかみんなわかっていた。今、ここにその肉塊が生まれ落ちることも、それをどうせねばならないかも。

航空局の地下室に冷凍保存した。

(なんで、そんな馬鹿げたこと！)

そのとき、ユージン・ムーアが父に言った台詞である。それは、彼だけではない。恐らく、そこに加担した人間も、みんなそう思っていた。けれど、逆らえなかった。

(何に？)

その答えを探すなら

(自分に)

としか言いようがない。自分の心、体、頭……、運命、それを作り出したDNA。

そうすることを、要求するのは、この世界そのものだったから。

そして、話は三十三年前の事件に続く。

航空祭の、その日その時、ユージン・ムーアは、ビデオカメラを回す友人と、壁に寄りかかって喋っていた。少しでも、母の気持ちを引き立てようと、父といっしょに、母を連れて遊びに来たのだ。馴れた基地内で、久しぶりに母の表情は穏やかだった。

その瞬間までは！

(あの赤ん坊が宙にいた)

ユージン・ムーアのすぐ目の前だった。母を見た。母の目は、

正気に戻っていた。長年、彼女を苦しめた、彼女を恐れさせた存在が今、眼前にある。彼女がそのことを認識した、その途端、世界は姿を変えた。ユージン・ムーアの前には、真空というのではない、が、空気さえも分解されたような、個体や液体はもちろん、気体の分子であつても大きすぎると思える、からの空間があつた。

(狂わなかつたのはなぜだろう?)

銃声が響いた。赤ん坊が地に落ちた。

(誰が撃つたのか? 受胎の時、森に集まつた人々、焚き火を囲んだ人々の中の誰か? 母のように、ずっとこの悪夢に備えていた人間がいたのかも知れない)

とつさに、ユージン・ムーアは、地下室に向かつた。

(なぜ、今、確かめねばならないのか、自分でもわからなかつた。でも、父のいうその赤ん坊であるのかどうか、確認せずにはいられなかつた)

エレベーターから、階段へ。地の奥底の隠し部屋。重い扉はそのままに、冷凍庫の扉もそのままに、肉塊に似た赤ん坊だけが消えていた。友人の声が聞こえた。ビデオカメラを持ったまま、ユージンを追いかけて来た。

その時、次の核爆発が起きた。

「まるで、ホラー映画のようでしょう」

そう言つて、ユージン・ムーアは、穏やかに微笑んだ。

そうして、その翌日、最初にここで観たビデオのオリジナル版を見せられた。差異などわからない程度のものだった。

ユージン・ムーアの話の中で、内海の心にしっかり焼きついた(宙に浮いた赤ん坊)というイメージも、明るい晴れやかな航空祭のテントや大道芸の中にあつては、変わった風船程度にしか見えない。それが何であるか認識する間もなく、人々は消されたのだろう。カメラの位置から赤ん坊は、向こうをむいている。非常にわかりにくい。

修正版では、空中の赤ん坊の後ろ姿にポップコーンの屋台をずらして、隠したという。

「ただでさえこんな非現実的な話。破壊のもとが新兵器ではなく、赤ん坊だったと言つたら、だれも相手にしてくれない」

ユージン・ムーアはそう言つた。

「私の位置からはね、しつかり目も鼻もない赤ん坊の顔も見えない。それから……」

彼は、赤ん坊の現れた瞬間を、コマ送りした。まわりをズームアップしながら見せる。背景にいる人々、一人ずつの表情。

みんな赤ん坊などに気付きもしない。コカコーラを飲みながら、喋っている。ピエロの動きに笑い転げている。夢中の当てゲームに興じている。ゆつたりとアイスクリームをなめている。その中で、ユージンの母親は、ホラー映画の主演女優のような恐怖に凍りついた顔だった。その隣り、そしてその隣り、居並ぶ人々のにこやかさ。航空祭らしい表情。それが……。ま

た居た。異質な表情。地獄の大王の前に引き出されたような顔。映像を端から丹念に検証していくと、四名、同じように、恐怖に引きつった顔をしている。皆、かなりの年配。そのうちの一名は、銃を持った警備員だった。

ユージン・ムーアは、実態を知っている唯一の生き残りとして、その後この事件の多くを任せられる事になった。事後処理がひと段落すると、何が起きたのかを探し求めた。徹底的に調べ上げ、膨大な資料を作り、検証し続けた。けれど、答えは導き出せなかった。

世界を守るというのは口実だ。世界中を見渡せばどこかに答えがあるかもしれない。一体何が起きたのか？ 再び、あの赤ん坊の出現する日がくるのか？ そして何より、なぜ母や彼らは、あんなことをしたのか？ あの時森で焚き火を囲んでいた大人たちを動かした思いがなんなのか？

「母は、素晴らしい人だった。心の強い、やさしい、慈愛に満ちた人だった。だから、生きている赤ん坊を、冷凍庫に入れるなんて、どれほどのことだったろう、と思うのだよ」

後年、鬱状態となり、精神に異常をきたしたのは、長らく彼女が心の奥に押し込めていた罪悪感のせいだと、ユージン・ムーアは考察した。

サクヤグループは、この事件に関われるほど古い組織ではな

い。しかし、ユージン・ムーアの目がそこへ向いたのには、いくつもの理由がある。

笹原由宜の書簡。DNAから記憶が失われていく、体を作る設計図が失われていくことを記したものだ。彼は、原因に放射線を挙げていた。ユージンたちの研究グループでも実験したことがある。手も足も目も鼻もないマウスを作り上げた。まさに、あの赤ん坊のイメージだった。

もし、笹原由宜がなんらかの秘密を手に入れたのだとしたら。その破壊者である赤ん坊を再び作り出そうとしているのだとしたら。笹原の娘は、手・足を失って死んでいったという。自分の娘で生体実験をしたのだろうか？ それに関わっているのが海老沢病院なのか？

その後、笹原由宜は、サクヤグループを作り、財力を蓄え、影響力を増している。

ヨーロッパとアジアの間で、グループは、一大勢力を持った。サクヤのエイジェントである塚田瑛佑は、土地を追われた難民の指導者となる。続々と集まる難民。その数は増え続けた。脅威を感じた統治者が、秘密裡に彼を暗殺するほどに。彼が生きて延びてこの日本に帰っているとの噂もある。

白居家のまわりには、人種も年齢も関係なく、たくさんの人間が集まり始めた。

「まるで、あの森での集会のように」

ユージン・ムーアの目は、遠い日の焚き火の火影をみるよう

に細められた。

もちろん、日本以外にも、注意せねばならない森、超能力者、科学技術、異能集団はあった。二十五年かかって、そのターゲットを、日本に絞ったのは、白居家の存在が浮き上がってきたからだ。

森を管理していた少女の両親は、彼女が出産時に亡くなるとすぐ、離婚した。父はそのままそこで暮し、あの破壊の日に消滅している。母親は、双子のもう一人の赤ん坊を抱いて、行方不明になった。どういうからくりか、偶然か、全く消息が掴めなかった。

それが、逆に、この六年、サクヤグループを調べ、笹原由宜を調べ、白居家を調べようになって、浮かび上がってきた。白居家の脇に住んでいた髪結いの女のところに拾われた女と赤ん坊。年回りが一致する。戸籍もない赤ん坊を白居家の当主は無理やり娶った。戸籍のからくりについては、偽造のはつきりした証拠もあがった。

ユージン・ムーアは語り続ける。

「初恋の少女と何話を話したか、ほとんど忘れてしまった。でも、山の頂からの帰り。他愛なく話したことが、妙に心に残っている」

どんな名前が好きか、という話をした。少女の祖母は、日本

から渡ってきた人で、日本の昔話や神話に詳しくあった。時折話すその中に、このはなさくやひめの伝説があった。

「ねえ、この花、と、さくや、どっちの名前がいいかなあ」

少女は、無邪気にユージンの顔を覗き込んだ。少年の早まる鼓動にも気付かず。

「このか、と、さくや。父に、双子の話を聞いたとき、突然、神の啓示のように、ふたつの名が思い浮かんだ。赤ん坊に名前は、付けられたのだろうか。そんな状況の中で」
(あの肉塊とて、名前は欲しかろう)

決定的だったのは、笹原由宜その人である。

彼が、突然養子を迎えようとしていると情報が入った。現地へ調査に送った部下からの報告に、見過ごせない事実があった。養女の母親の失踪である。その地にあつた大木とともに姿を消した。最後の目撃者が、その少女である。この符号は、何なの

だ。
どうしても、笹原由宜に会いたかった。危険を冒しても、会わねばならないと思った。

ユージンが、

「母親が消されてしまった」

と言うと、

「どんなふう」

と、笹原は尋ねた。

(なぜ、そんな問いを発するのだ)

ユージンは、笹原由宜が消えるということの意味を知っていると感じた。木端微塵に消滅する、ということを知っている。『あの赤ん坊がそれを成し得る』ことを知っている。

そして、笹原の周辺を調べる内海がその存在を感じたように、ユージン・ムーアの方も、内海が存在に気付いた。内海から、笹原の罪について聞いたとき、ユージンは深く考えねばならなかった。果たして、このバラバラのピースをどう繋ぎ合わせたら、真実が見えてくるのか。

もし、白居嘉一郎の妻が双子の赤ん坊の一人であるなら、彼女は、自分の母親と同じ十三歳で長女の葉子を産んだことになる。二十歳で長男、二十三歳で次女を産んで、死ぬ。赤ん坊の遺伝子は受け継がれていた。葉子は太郎という子を残している。笹原という人物はどう関わってくるのだろうか。

戸籍上は、白居家の婚外子であり、葉子たちの従兄にあたる。しかし、籍に入れられたのは、十二歳にもなってからだ。どこからか、突然現れた馬の骨としか思えない。それが、抜群の頭脳を持っていた。嘉一郎に取り入って白居株式会社勤め、嘉一郎が亡くなると、今度は若干二十歳の長女葉子とともに、サクヤグループを創立する。そして、十年後には葉子のすべてを受け継いで、サクヤグループのトップとして君臨する。

何が目的なのだ。ただ成功を収めたいだけの男ならいい。栄

耀栄華を極めたいなら、それでいい。

しかし、彼は、白居家を管理し、赤ん坊の子孫をそこに住まわせている。廃人となった長男を見張り、DNAの研究は海老沢病院が引き継いでいる。砂漠でのテロ集団はその後どうなったのだ。

難民の皮を被ったゲリラ。浮浪者のたまり場のような白居家。心療内科という名のもとに集まってくる動かない子どもたち。不安を掻き立てられるのは、通常を逸脱しているからだ。消えることの意味を知っていた、その男の目の奥にあった闇。心はどこかの世界に繋いでしまった、虚ろで、深い、そして絶望の目。

ユージン・ムーアの話の聞けば聞くほど、内海は、もはや手を引くとは言えなくなっていた。ユージンが、年齢的に厳しい状況なのもわかる。そうした年になって、恐れていた事態を迎えようとしている焦りもわかる。敵がこの日本にいる。それゆえ、日本人であり、日本の警察組織を知る内海を後継者にと考えた。

(しかし、本当に自分でいいのか。これほどの危機に立ち向かえるのか。いや、こうして、上司や同僚が次々に舞台を降りてしまう今、選択の余地はない)

第七話 『包囲網』に続く